

* サマリヤを通る道。

ユダヤからガリラヤへ行く最も近い道はサマリヤを通る道であったが、ユダヤ人とサマリヤ人は当時互いに嫌い合って交流がなく、ユダヤ人はほとんどサマリヤの町には入らなかった。その理由は、アッシリヤ帝国にサマリヤが滅ぼされたとき、多くの外国人がサマリヤに来て強制的な雑婚が起こったからである。そのような反目の中を敢えてイエス・キリストと弟子たちはサマリヤを通ったのである。それは、サマリヤにも救い主の到来を知らせるためであった。

* サマリヤの女との出会い。

イエスはサマリヤのスカルという町に来て、ヤコブの井戸と呼ばれる井戸の傍らに座って休んでおられた。そこに一人の女が水を汲みに来た。イエスはその女に「水を飲ませてください」と声をかける。女はびっくりした。ユダヤ人とは付き合いもないし、外で男の人から声をかけられることもなかったからである。

* 生ける水を与える人。

「イエスは答えて言われた。『もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。』

(4 : 10) 「神の賜物」とは神からただで与えられる素晴らしい恵みという意味だが、具体的には、すなわち「生ける水」のことを言っていると考えられる。女は、霊的なことにはまだ関心がいっておらず、文字通りに受けとって、汲むものもないのにどうやって私に水を与えるというのかと問い直す。族長ヤコブが掘ったと伝えられているこの井戸は今、ギリシャ正教会の中にあり、飲むこともできる。

* 生ける水は魂の渇きをいやす。

「イエスは答えて言われた。『この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。』(4 : 13~14) 喉が渇いて水を飲んでもまた渇く。私たちは、お金や富、名誉や地位や権力、異性など、欲望に従って多くのものを求める。そして、これら人間の肉欲は限りがなく、満足することがない。社会の悪の根はここにある。一方、これとは別にだれでも魂の渇き、霊の渇きを覚える。この渇きが癒されなければ私たちの本当の幸福はない。サマリヤの女に霊の渇きに関心を向けるよう、イエスは、女個人の生き方を顧みさせるのである。主イエスに与えられる「生ける水」は渇くことのない、永遠のいのちへ水である。